

10/29(木) 18:00～ 2号館17階にて本学特別上映会開催!

入場無料 申込不要

チベットを離れ、私は北京で生きぬく。

大都会北京の片隅で出会った
チベット人親子とアメリカ人ジャーナリストの
不思議な縁を描くドキュメンタリー。
NHK「日本賞」最終候補作品。

本編上映(約60分)後、
フォード監督との
Q&Aセッションを開催。

<逐次通訳あり>

日・中・英語どの言語での
質問も歓迎します。

ジャスリン・フォード初監督作品

Nowhere to Call Home

ノーウェア・トゥ・コール・ホーム



ジャスリン・フォード初監督作品

Nowhere to Call Home

ノーウェア・トゥ・コール・ホーム

<あらすじ>

だれもがそこで生き、そこで死ぬ、チベット高原奥地の農村。

ザンタは、ただ好きになった別の村の男と結婚するために、習わしに背いて村を出た。

しかし夫は若くして病死。義父母との暮らしは過酷で、強盗の罪で刑務所にいる義兄と結婚させられそうになる。

息子ヤンチンを学校に行かせることもできず、ザンタは家を飛び出し北京に流れ着いた。

北京でラジオ記者として活動する米国人女性ジャスリンは、ある日、路上にアクセサリーを並べて売るザンタに声をかけた。

腕輪を買ったのは、下心があったからだ。

中国政府が外国人記者に対しチベット地方の取材を制限する中で、ジャスリンはザンタと電話番号を交換した。

それから2年後。ザンタの方から突然電話があった。

「子どもをもらってくれない？」といった何が母親に、通りすがりの外国人に子どもを渡す決断をさせるのだろうか。

ジャスリンは、息子ヤンチンの就学援助を通し、住宅や職探しにも差別を受けるチベット人母子の極貧生活に大きく関わっていく。

旧正月を過ごすため、列車に乗ってチベットの義父の家に向かう3人。

四川大地震で崩壊した村を抜け、ようやくたどり着いた山村で、義父は孫を奪おうとするのだった。

「女には一銭の価値もない」と言われるこの村で、男の孫は義父の家のもの。

よい将来のために教育を受けさせたいという、ザンタの切なる望みは叶わないのだろうかー。

<ジャスリン・フォード監督>



1959年、米国マサチューセッツ州出身。30年以上にわたり、日本と中国をベースにアジア報道に関わる。うち日本在住は19年。1986年から94年まで勤務した共同通信社では、官邸記者クラブに所属する初の外国人記者として、慣行にとらわれない率直な質問を重ね、昭和から平成にかわる日本の動きを世界に伝えるとともに、日本のメディアにダイバーシティの視点を持ち込んだ。その後、アメリカの公共ラジオの番組「マーケットプレイス」の東京・北京支局長を10年以上務め、2001年には中国国際放送局の生ニュース番組で、外国人初のプロデューサー兼ホストとなった。「Nowhere To Call Home: A Tibetan in Beijing」は初の映画作品。

